旭川医科大学　二輪草センター
（復職・子育て・介護支援センター）

二　輪　草　だ　よ　り

平成28年8月号
発行：二輪草センター

第24回　二輪草セミナー終了報告

看護職キャリア支援　職場適応支援担当　浅利　尚子

7月8日（金）、二輪草セミナーを開催しました。今年度は、中堅看護師に「心に残るエピソード」を語ってもらい、日々忙しく過ぎていく毎日ですが、少し立ち止まって「看護」の力を再発見し深めていきたいと考え企画しました。参加者は、看護職員・看護学生・看護学科教員・薬剤師で、29名でした。

中堅看護師2名の心に残る看護エピソードから、今の自分に影響を与えた人との出会い、心に残っている出来事が今の自分にどのように影響を与えているか、「大切にしている看護」について語っていただきました。

6階東ナースステーション　関本　泰子さんからは、看護学生の時の受け持ち患者さんとの出会いから、入職しての再会、初めて受け持った患者さんとの関わり、受け持ち看護師としての存在意義を思い出させてくれた患者との関わりが紹介されました。たくさんの患者との出会いが自己の看護観の形成につながり、後輩への指導の基盤になっていること、「患者さんの辛い時を支えることができる看護師という仕事の魅力」について話されました。10階西ナースステーション　佐藤　真帆さんからは、入院が長期化してストレスフルになった患者との関わり、患者の家に帰って妻と過ごしたい意向をくみ取ったケアについて語ってくれました。患者の言葉の背景にあるものを見ることの大切さ、患者と真摯に向き合いありのままを受け止め寄り添うことの大切さ、患者・家族が今どの段階にあるのかを理解したケアの重要性、患者－家族の関係性や時間を大切にし、支援していくことの大切さを学んだと話されました。

語りの中で共通していたのは、多くの患者との出会いが心の中に刻まれており、その体験は、今の自分の看護観につながっているということです。参加者のアンケートからも「大切にしている看護を知ることができよかった」「二人のお話を伺ってさらに看護の魅力を感じることができた」などの感想があり、自分の体験のように共有し、みんなで看護観を深めることができました。改めて「心に残るエピソードや看護という仕事の魅力」を振り返ることは、講演者・参加者みんなにとって、とても貴重な時間になったと思います。

病児一時預かり室、バックアップナース、病児・病後児保育室、カウンセリング相談【7月20日～8月19日までの利用状況】

病児一時預かり室	依頼回数	0 回	利用回数	0 回
バックアップナース	依頼回数	15 回	稼働回数	15 回
病児・病後児保育室	依頼回数	13 回	利用回数	11 回
カウンセリング相談			利用回数	1 回

＊病児一時預り室、病児・病後児保育室は全職員・学生がご利用になれます

センターの活動予定　◆9月下旬　二輪草プラン推進委員会議
二輪草だより9月号発行

イブニングセミナー終了報告

二輪草センター助教　菅野 恭子

2016年7月５日に第7回イブニングセミナーが開催されました。アメリカでご活躍されている12期の佐竹典子先生が今年度の同門会賞を受賞され、受賞記念講演の翌日若手医師、学生を対象に『バスケから学んだこと』と題して自身のご経験やメッセージをご講演頂きました。佐竹先生は卒後日本で研修と研究をした後、1997年よりポスドクとしてアメリカへ渡り、臨床研修をやり直し、UCLAのクリニカルフェローを経て2015年よりUC Davisのassociated professorとして臨床と研究を行われています。アメリカで研修医、指導医、そしてPIをして、大学のときのバスケ部での経験が大変役に立っていることを発見されたそうです。ちなみに医学部6年生のときチームが北医体、東医体、全医体全て優勝、個人ではMVPと得点王を獲得した偉業をお持ちです。以下は講演の内容です。

佐竹先生

①やればできるという自信：アメリカで臨床研修をやり直す決意をしたのは30歳を過ぎてからで、ポスドクをしながらの試験勉強、そして2年間のきついレジデントの仕事は根性と体力が不可欠です。学生時代にバスケに打ち込みその後短期間で集中して勉強し国試に通ったこと、練習と連続の試合で鍛えた体力が、やるときにはやるという自信になったそうです。

②負けを認める：日本やアメリカで医学生を指導すると、自分ができないということを認識しておらず、指摘しても認めようとしないと感じたそうです。指導教官に話したところ、部活に入っている人が少なく、スポーツで試合に負けるという経験をしたことがないため自分はできると思い込んでいるからではないかと言われたそうです。現在でも論文やグラントの reject や、意地の悪いコメントに向き合わなければなりません。負けを認めるのはいつになっても頭に来るし、おもしろくありませんが、認めて前に進むということは負けた試合から学んだそうです。

③1日100本シュート：5年目の東医体で負けたときに、くやしくて毎日100本3点シュートを打つことを決め、お正月も試験の日も、一日も欠かさずにやりとげたそうです。北医体で他のチームのメンバーになぜそんなにシュートがきまるのかと聞かれ、毎日100本の成果ですと答えるとお見それしましたと言われたそうです。こつこつ努力することはどこにいっても、臨床や研究においても必要とのことです。

④チームワーク：自分一人では仕事はできないので、チームワークが重要ですがチームの中での自分のあり方はバスケから学びました。

⑤チームをリードする：現在の立場で研究をする際、人を選び、適材適所において、指導するということが、バスケ部時代にキャプテンとしてチームをまとめるのに非常に似ている事に気づかれたそうです。実験を組み、うまくゆかないときにtrouble shoot して次を考えるのも、チームの練習メニューを決めるのと似ています。以上の講演内容はバスケ以外にも通じることで、成功の裏には弛まぬ努力と部活で培われた体力、リーダーシップである事を再認識しました。今年の参加者は学生18名、職員15名でした。

佐竹先生、お忙しい中貴重なご講演を頂き誠にありがとうございました。

【お問い合わせ先】　旭川医科大学　二輪草センター（復職・子育て・介護支援センター）
〒078-8510　北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1-1
TEL：0166-69-3240（内線3240）サンニンヨレ　FAX：0166-69-3249
開設時間　：8時30分～17時15分　E-mail: nirinsou@asahikawa-med.ac.jp
ホームページ：　http://www.asahikawa-med.ac.jp/hospital/nirinsou/